

家族支援にあたって家族レジリアンスに 着目することの有用性

——「家族が立ち直る力」についての知的障害児・者施設
ベテラン職員のフォーカスグループインタビューを通して——

得 津 慎 子*

The Effectiveness of Promoting Family Resilience on Family Social Work

——through the focus group interviews about “family resilience” for experienced social work
supervisors at a social work agency for the people with intelligent disabilities——

Shinko Tokutsu

要旨：近年の社会福祉の地域生活支援とエンパワメントの流れに沿って、個人とその家族が自らのストレングスをフルに発揮して、地域で自立生活を送るために家族が注目されてきている。家族は最早「含み資産」ではなく、社会資源の一つとしてその役割を期待され、そこで、家族支援の必要性はいや増している。

ところが日本においては、家族福祉やその具体的な方法論であるファミリーソーシャルワークについてはあまり論じられてきていなかった。

それに寄与するために、筆者は家族レジリアンス概念をてがかりに家族の力について調査してきた。今回は、知的障害児・者施設の施設スーパーバイザークラスのベテラン職員のフォーカスグループインタビューの結果について報告する。結果は、職員たちはシステム的に家族に働きかけていることを示し、家族は安定を壊して変化する力があるものと考えていた。

Abstract : These days, according to the tide of “the independent life at home by oneself,” families, should again, take the main role of caretakers of the family member with some difficulties instead of “an implicit social resources of the family member and for their community.” Hence, the necessity of family social work that could support and empower families has been increasing. But, unfortunately, family social work is still the underdeveloped field in Japan. For the contribution for that, I have been studying about family resilience on the basis of system theory. I carried focus group interviews with experienced social work supervisors at some social work agency for the people with intelligent disabilities. The results show that they tend to work with families systemically without consciousness, and they consider that families might have the power of breaking homeostasis to change the challenging situations.

Key words : 家族レジリアンス family resilience フォーカスグループインタビュー focus group interview 知的障害者家族 family with intelligent disabilities 地域での自立生活 independent life at home in their community 家族支援 family social work

*関西社会福祉科学大学社会福祉学部 准教授

I はじめに

近年の社会福祉のキーワードは、地域生活支援とエンパワメントである。「国民ができる限り家族とともに地域で支え合って暮らすことが可能となる社会を作っていくという方向性」(平成 18 年度版厚生労働白書、2006) が示しているものは、個人とその家族が自らのストレスをフルに発揮して、地域で自立生活を送ることである。そこで家族は最早「含み資産」ではなく、社会資源の一つとしてその役割を期待されている。今日の超高齢少子社会と家族のニーズの多様化に伴って、家族への支援や介入の必要性が多く語られている(例えば、畠中、2003；山根、1998、2006；山田、2006；野々山、1992)。一方、子どもの養育や高齢者の介護等、家族だけでは処しきれないニーズも多く、ケアの社会化が叫ばれて久しい。「個人が人としての尊厳をもって、家庭や地域の中で、障害の有無や年齢に関わらず、その人らしい安心のある生活を送ることができるよう自立を支援する」(厚生労働省社会援護局、2004) ためにも地域での自立支援における家族への呼び声が高まり、家族の支援の必要性に目が向けられるようになってきた。確かに、例えば、児童施設におけるファミリーソーシャルワーカー(家族支援専門相談員)の配置(2003)や様々な事業所や施設において家族支援や家族相談は欠かせないものとなってきている。

しかしながら、家族への支援を得ても尚、家族に求められている役割は過重ではないだろうか、また、自立支援のエンパワメントという言葉の持つパラドキシカルな拘束性は個人や家族、援助者にどのような影響力を持つのであろうか。「家族単位制の小さな福祉国家」(伊田、2003)での「家族依存型福祉」(立岩、1995；中村、2003)において「社会の含み資産」とされている家族、その家族の中でもとりわけ母親に当然のように負担がかかる現状をどのように理解したらよいのだろうか。

本稿は、上記の問題提起をふまえながら、家族がもともと持っている力を、ワルシュ(Walsh, 1998)の家族レジリアンス概念を媒介として明らかにし、ファミリーソーシャルワークの具体的な方法論を呈示する研究の一端として、知的障害児・者施設を中心とする A 社会福祉法人のスーパーバイザークラスのベテラン職員に、家族レジリアンス「危機的状况にあって家族が立ち直る力」を職員がどのようにとらえているかについてフォーカスグループインタビューを行なった結果を報告するものである。

本研究のフィールドを知的障害児・者施設に求めるのは、例えば「知的障害者の『親亡き後』問題」という言葉が示唆しているように、多くの知的障害者の生活が家族(=親)頼りであるという現状が、現代の社会福祉における地域での家族支援の問題を象徴化しているように感じるからである。

II 研究の目的と背景

筆者は、家族システム論に依って、そこでの知見の一つである家族レジリアンス概念(Walsh, 1998)を契機に家族の力について考えて来た(得津、2000、2003、2004、2006、2007)。家族レジリアンスとは、「危機的状况を通して家族が家族として回復する可塑性(復元力)」(Walsh, 1998)を指す。家族はさまざまに困難な人生の出来事にあつて、そのチャレンジに耐え、元通りに跳ね返り、やり過ごして日常生活を営み、より強く、より資源豊かになる能力がある。障害者本人と家族にはもとより自らの危機的状况を越えて日常生活を過ごす力がある。より有効な家族への支援とは、この家族レジリアンスを促進するものであると考えられる。今日の日本の社会福祉分野での主潮となつてきているエンパワメント・アプローチは、デイスエンパワーされた個人や家族に側面的にエンパワーすることで、それぞれの解決を生きていくことを志向して、その持てる力を活かす「自立」のための方法論である。また、「今日の

ソーシャルワークの理論の多くは…（省略）…その人が持っている適応の力あるいは、問題解決能力といった潜在的なポジティブな力（アセット）の育成、あるいはエンパワーリング（empowering）を重視して」（芝野、2002）おり、その自らの力に着目する家族レジリエンスを明らかにすることはエンパワメント・アプローチの文脈からも意義があると考えられる。

それでは、家族の力が発揮されるための支援について考えるとき、まず、そもそも家族とは何であろうという問いが浮かぶ。家族の定義は様々であり、家族は語られる文脈によっても異なり、一般的な家族定義にこだわるのは本稿においては実際的でないと思われる。しかしながら、例えば知的障害児・者のフィールドにおいては、「家族とはその構成メンバーに対して、いつくしみの気持ちと保護を提供する機能的な社会支援の単位」（リアル、2005）といったような定義もなされている一方で、家族福祉においては「家族」とは「自分たちで家族だと思ふ人々が家族」（野々山、1992）であるとの論もある。子どもの養育の責任、親の監護権、扶養義務等、「家族」の責任は確かに法的にも定められているようであるが、そこに「家族」は同定されていない。一般的には、知的障害者の親やきょうだいで、同居している／いた人びとであり、保護者とその家族全体であると考えられるのであろうが、例えば、中根（2006）にみられる「社会福祉学においては専ら知的障害児・者家族は一体のものと捉えられてきた」というような批判もある。確かに「障害児家族＝親＝母親」がケアする人であり、支援者の家族支援は、親が障害を受容できるように、告知に始まってその「親亡き後の安心」（植戸、2007）までのプロセスに上手に関わることであり（中田、2004；要田、1989）、子どものことは親が決定するという枠組みは強いようである。

だが、実際に支援の対象は障害者本人である。本人が家族や支援者から主体性を持って自立生活を送りうることを目標とされ、障害者本

人の自立のプロセスとは、家族からの自立でもあり、その歴史は古い（カリフォルニア・ピープルファースト編、2006；小澤温、2003）。そこにおいては、方向性や目的も徹底的な本人中心の姿勢が求められる。生きていく形や姿は本人が決めるものなのである。

ということは、同時に、家族が本人も含めてどのような形で過ごしていくかについて、家族が決めてもよいとも言えるのではないだろうか。本人の生きていきたい姿と家族の姿が重なる必要はない。つまり家族福祉とは個人も集団も互いの犠牲にならず、それぞれが自己実現していくこと（野々山、1992）である筈である。しかしながら、この家族主体については殆ど語られず、副田（2000）が従来家族の義務は語られても、家族の権利は語られていないとわずかに指摘しているに留まっている。家族の「主体」を考えることは重要であり、家族支援を論じるにあたって、個人のための社会資源としての家族支援なのか、家族のための家族支援なのかというところは大事なポイントである。しかしながら、個人と家族はレベルの違うシステムであり、それを2項対立的に捉える視点は一端おきたいと思う。

また、ワルシュの基本的立場は家族療法であり、家族の捉え方はシステム論による。筆者も家族をシステムとして捉える。家族はたまたま「家族」と称される一つの機能する集合体であり、少なくともその場の人びとの日常生活では現実的な影響力を持つ社会的単位であり、全体としての家族（family as a whole）として捉えられる。システム論を持ち出すまでもなく、岡村重夫は1963年に家族福祉事業は家族全体を志向（family-oriented）するものであると述べ、家族の全体を対象とし、家族内の関係性に留まらず、家族外との関係性にかかわる全般的なものであると述べている。ここに既に家族と個人を分別するまでもないことが論じられ、分別の不毛についても指摘されている（鶴野、2003）。ところが現実的には『システムとして

の家族』としての捉え方には根強い批判がある。つまり、「家族の内部で『誰がケアするのか』という問いが家族の外側からは隠蔽される」(中根、2006)と批判されるように家庭内での弱者の存在が問題となってくる。とりわけジェンダー論者たちから批判されてきた家庭内における性別役割やステレオタイプのな家族役割を強調するものともとられがちである。

これこそが家族福祉において「家族主体」という立場から論じられねばならないところなのである。つまり、個人一人ひとりのウエルビーイングを明確にする必要があるということである。例えば重度の知的障害者の場合、本人のアドボカシーと同様に、家族、とりわけケアの主体とされる母親のアドボカシーも必要であろう。

ところが、現状は、社会福祉基礎構造改革、自立支援法を経て、「家族・地域の絆を再生する国民運動を推進する」(平成 18 年「新しい少子化対策について、少子化社会対策会議」)のような流れとも相まって、地域への自立生活移行に際して、本人主体や自立への流れが増せばますます家族の負担や責任がより大きくなるというパラドキシカルな状態である。知的障害児・者のフィールドにあっても、親が自ら抱え込み、家族の力が期待され、本人の力と家族の力の混用によって、誰が誰の責任で誰に対して何を行なうかが極めて曖昧である。例えば松倉(2000)は障害者の親の障害の受容について、ポストモダンな立場からそのストーリーを立ち上げていくことの重要性を述べている。西村(2005: 410)も知的障害児・者の「主体」や「自己決定」、つまり、それぞれの主体の確立、あるいは確定という作業は、障害者本人、親、家族に加えて支援する人びとも含めて、その障害の特質から、「主体」そのものを問うことに混乱を生じがちであると述べている。とりわけ重度の知的障害者の家族においては、「親の障害受容」の考え方、そのプロセスや障害者家族のアイデンティティ(麦倉、2004)、「療育」に

対するスタンス、親子の分離や本人の自己決定やアドボカシーの問題等主体に関する論議等がもっとなされるべきであろう。その上で、家族役割や求められる家族機能とは何かを精査すべきである。

こうしたことを踏まえて、家族についての具体的な方法論(ファミリーソーシャルワーク)が求められるところであり、筆者は、そのてがかりとして家族レジリアンス概念を契機として、知的障害者と家族の自律性が発揮できるような家族支援のツールを提示したいと思っている。その一助として、家族支援を行なっている知的障害児・者施設のスーパーバイザークラスのベテラン職員に「家族レジリアンス」についてフォーカスグループインタビュー(FGI)をすることで、その意識や実践や課題を探り、実践現場でどのように「家族レジリアンス」を有効に促進しうるかを明らかにすることは、知的障害者支援において意義深いと考えられる。

Ⅲ 研究の方法

1. 調査の目的

「家族レジリアンス—家族の危機と回復にあたっての家族のちから」についての A 社会福祉法人知的障害児・者施設のスーパーバイザークラスの職員のフォーカスグループインタビュー(FGI)とその分析によって、社会福祉援助にあたっているスーパーバイザークラスの職員が家族の危機的状況と日常生活をうまくやり過ごすちからについてどのような考え方を、どのようにそれを活かしているかを知る。

FGI を選んだ理由は、FGI は参加者の相互作用を前提とし、それを活発にするように運営され、グループダイナミックスによって、テーマがより多様、多面的になること、グループによって安心感もたらされ、率直な反応がのぞまれ、参加者中心の運営により自発的な反応もたらされる(安梅、2001、2003; ヴァーン、1999)等の理由による。グループメンバーは既知の間柄であるが、同じ法人で家族への危機

対応をしている同じ立場や経験を分かちメンバーであることから、内容がより専門的に濃くなることを期待した。

A 社会福祉法人は、現在保育所や知的障害児・者、高齢者対象の12施設・事業所を持っている法人であり、30年以上家族支援に独自のこだわりを持ち、力をいれてきた施設である。筆者が家族支援に関する研修を行ったことを契機に、本研究のフィールドを依頼した。FGI実施以前から半年間程度、家族への聞き取り調査を行っており、文献資料、施設長や職員とのインタビューややりとり等から以下のような特徴があると思ひ、それらが本調査に適していると思ひ、企画・依頼したものである。

A 社会福祉法人の支援の特徴と思われるもの (主に内部からの資料による)

(1) 障害児・者主体の支援。

①本人に寄り添って、その主張に耳を澄ます。本人の行動からメッセージを読み取ろうと最大限の努力をする。

②職員と家族が歩調を合わせてケアリングな対応をする。

③家族支援の充実。

④職員の現任訓練、組織的なスーパーバイズ体制（トップから中堅に、中堅から新人へ）。

⑤職員が家族や本人と関わる際に関係性の重視。自分を問う関係性の視点。

(2) 危機的状況に対しての組織的なスタイル。

①職場横断的な対応できる経験ある職員のチームによる危機介入。

②危機介入に当たっては、制度の枠組みを越える場合もある柔軟な取組み。

③継続的なトップやシニアメンバーによるスーパービジョン。

(3) 継続的支援。

乳児院・保育所・児童館・知的障害児・者通所施設・グループホーム等で系時的な本人支援に伴って、ロングスパンの家族支援を行なっている。

2. 倫理的配慮

まず、A 社会福祉法人に「調査企画書」を示して承諾を得た上で、グループメンバーに、調査に先立って、「調査協力のお願ひ」を配布し、①本調査の目的と方法について説明、②匿名性と守秘義務を約束、③ビデオによる録画の了解、④最終的にフィードバックを行うこと、⑤質問等の問い合わせの窓口として施設研究所員と調査者の連絡先の明示をした。

3. 調査デザイン

(1) フィードバックグループも含めて全3回のグループ討議。

(2) 事前に「調査のお願ひと同意書」「FGIに先立ってのお願ひ」(図1「家族レジリエンスのイメージ図」)「アンケート用紙」を配布し、家族レジリエンス概念の理解を深める為に予め簡単に家族レジリエンス概念について説明し、また、本調査における家族の前提を共有した。その際の家族についての前提は以下であった。

①「家族」の形はいろいろであり、現在一人暮らしの場合もあり、未婚、既婚、子どもの有無は問わない。

②「家族」とは「自分たちで家族だと思ひ人々が家族」で、家族だからと言って、必ずしも相互に引き受け合う必要はない。

③「家族の回復」の状態は、必ずしも「しあわせ」で「問題のない」状態を指すわけではない。

④唯一の「家族」の理想像を呈示するものでも、その枠組みにはめようとするものでもない。

⑤家族と個人やウエルビーイングの考え方は

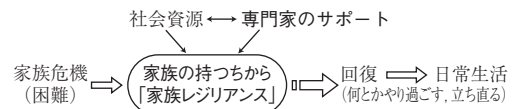


図1 「家族レジリエンスのイメージ図」(グループメンバー用説明文書より)
「家族は危機的な状況を乗り越えるときに、自分たちで自然に元に戻るちからがある」

多様であり、それらに対して単一の価値感を呈示するためのものではない。

(3) インタビューガイドー話し合うための質問項目ー

①ご家族の持つ力についてうかがいます。ご家族は危機的状況にあって、ご自分たち自らが危機的状況を乗り越えるちからがあると思いませんか？

②それはどのような力でしょうか？ ご家族のそういう強さ（ストレンクス）について具体的にお話し合ってください。

③ご家族との関わりについてうかがいます。ご家族が自らが危機的状況に対処できるような支援として、どのようにご家族と関わっていますか？ ご自分のご家族への関わりで、家族自身の自然な力を促進する思い当たるところについてお話し合ってください。

④あなたはサービス利用者の支援に当たって、どのようにその家族に関わってこられましたか？

4. 記録と分析

グループ各員の承諾の下にビデオ 2 台によって録画した。当日の録画担当者が非言語的なものも含めた逐語録を起し、研究協力者 2 名（A 研究所所員・発達臨床専門大学教員）が筆記担当者として記録し、逐語録と合わせて検討

した。更に発表者が何度もビデオと合わせて検討した。

分析方法は、安梅（2001）のフォーカスグループインタビュー法によった。まず本調査において「家族の力」等の焦点となるような内容に合わせて「重要な内容」、「意味のある内容」を拾いだし、「重要アイテム」とした。その背景要因に留意しつつ、それを束ねて見出しを付け、「意味のある情報の体系的なまとめり」で「それ自体で有益であるような、最もすくない情報量」である「重要カテゴリー」を抽出した。その重要アイテムの抽出には研究協力者 2 名のメンバー・チェックングを受け、さらにカテゴリー化は 1 名の研究協力者と共に行なった。

全 3 回行った FGI の冒頭において、それぞれ毎回、前回のグループの分析の結果をフィードバックし、そこから議論を拡げていった。

5. 実施概要

- (1) 2006 年 9 月、12 月、2007 年 3 月に実施
- (2) 場所 A 社会福祉法人付属研究所
- (3) グループメンバー：A 法人のスーパーバイザークラスの職員。A 社会福祉法人スーパーバイザークラスのベテラン職員（配属施設種別によらず、危機介入時にはチームで対応するメンバー）

表 1 「参加者一覧」

	性別	年代	職 種	経験年数(A 社会福祉法人内)	施設種別 (2007 年 3 月現在の呼称)	1	2	3
A さん	女性	30 歳代	指導員・主任	14 年	知的障害者通所授産施設	○	○	
B さん	女性	30 歳代	保育士・主任	15 年	知的障害者通所更生施設	○		○
C さん	女性	30 歳代	指導員・主任	8 年	知的障害児通園施設	○	○	○
D さん	女性	40 歳代	保育士・主任	4 年	知的障害児通園施設	○	○	○
E さん	女性	40 歳代	保育士・主任	19 年	通所授産施設	○		
F さん	男性	40 歳代	ケアマネージャー・主任	16 年	地域生活支援センター	○	○	○
G さん	女性	50 歳代	保育士・主任	11 年	知的障害者通所更生施設	○		○
H さん	女性	40 歳代	介護支援専門員・主任	20 年	高齢者（居宅介護支援、通所介護、訪問介護）		○	○

- 1 回目：男性 1 名、女性 6 名の計 7 名。
30 代～50 代。経験年数 4～19 年。
- 2 回目：男性 1 名、女性 4 名の計 5 名。
30 代～40 代。経験年数 4～20 年。
- 3 回目：男性 0 名、女性 6 名の計 6 名。
30 代～50 代。経験年数 4～20 年。

6. 分析結果

3 回の FGI で語られた内容は、家族が危機的状況を回復して日常生活を過ごしていく力は、最終的に①家族とは、②障害者家族の家族支援の前提、③家族システムの特徴、④家族のもてる力、⑤家族レジリエンスと言われる家族の力、⑥施設職員の家族レジリエンスを促進する支援のプロセスという 6 つの重要カテゴリーにまとめられた (図 2 「FGI のまとめ」参照)。

(1) 家族とは——一般的な家族の特徴として考えられること——

①家族は多様で、そこにすでにあるもの。好むと好まざるに関わらず、所与のものとして存在する濃い関係であり、拠り所である。それは血縁関係とか夫婦とか愛情関係、同居の有無、時間の長さではない絆であり、よくも悪くも大きくぶれ、アンビバレンツなものである。所謂

定型家族が理想かもしれないが、理想の家族があるわけではない。

②家族は、パワフルで、子どもを育てる場であり、とりわけ障害児・者の場合は母親役割が大きい。情緒的機能が求められ、障害児・者には安心して寄り添う存在。共依存にもなりがち。

③家族は「役割」を持って「自分が役に立つことが支え」であり、障害を持つ子どもが支えとなる場合もある。父親はいるだけでよいかもしれない。

④親子は宿命だが、夫婦は契約。離れられるが、離れられない。

⑤家族周期によって変化し、所謂健常児のライフサイクルとは異なっている、それぞれの家族関係のとりわけパワーが変化するときが危機的状況に陥りがちである。家族周期上の変化の時期に本人が力を付け、それを支えることが重要である。たとえば、家族周期上の離巢期を迎えて一般的には子どもの問題はとりあえず終結とされるのかもしれないが、障害者家族は、家族が成人の子どもを継続的に支えていくことが多く、そこで介入的な支援が必要となる場合もある。

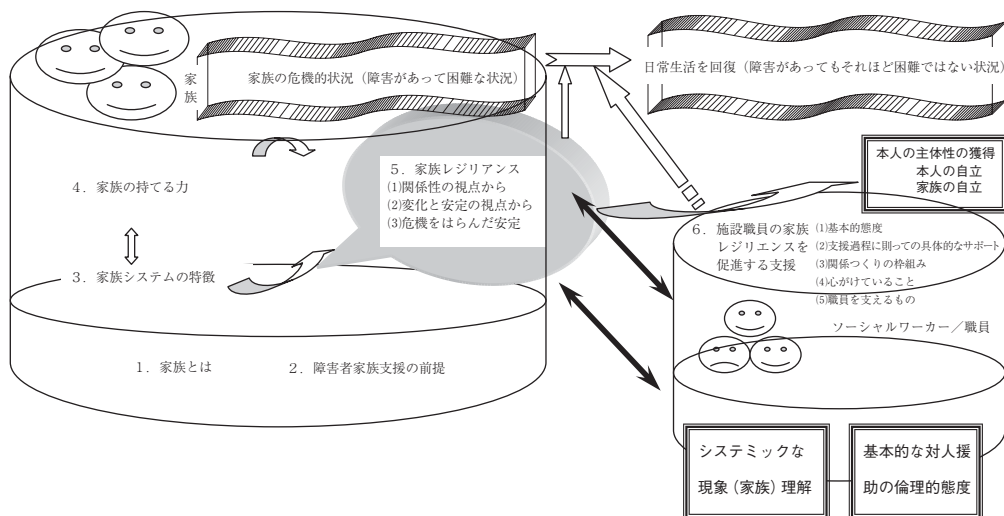


図 2 「FGI のまとめ—おのおのが主体性を獲得するプロセス—」

⑥システム論的な家族観として、家族は「壊していく力」とそれを「再生する力」がある。その維持にはむしろ『『壊して』再生することが必要』であり、家族支援はその壊していく力が出るように向い合う手伝いをしたり、調整役をするものである。

(2) 障害者家族の特徴と家族支援の前提

①家族のデメリット。どうしても家族に負担がかかっている、所謂機能不全に陥りがちであったり、家族生活を維持していく力が弱い。家族が維持されるプロセスは、重度、とりわけ A 法人で多くとりあげられている強度の行動障害の場合は、家族ストレス状態への適応が困難で、家族全体が揺らぎ、危機的状況となりがちである。職員の危機介入もあり、従来の家族関係が変化する。このとき、家族が変化しないままに乗り切ると、また危機的状況を迎える。

また、障害児・者の家族役割が期待される。母親役割への期待やきょうだい役割の期待。特にきょうだいに差別やいじめなどの影響は大きい。

②家族のメリット。障害児を持つプロセスを経てプラスの面もある。家族関係を深く体験し、家族の凝集性が高まる。子どもがかすがいとなって夫婦関係が続いたり、形の上で却って壊れにくい場合もある。

③一般の家族と同じ「普通」の家族で、日々の暮らしの中で、特に障害者家族の困難があるわけではない。

④障害者家族支援の目標は本人中心の「自立」生活である。居住形態は問わない。

⑤A 法人での家族支援は本人のための家族支援である。ただし、家族が支援を依頼しなければ、本人の支援をしなくてもできない。どんな家族であっても本人支援は家族次第なので、家族との関係は重要である。

⑥適応について。家族の日常生活での適応や本人の社会適応が目標ではない。障害の程度が軽度であれば、家族は生活により適応しやすいので不安定なまま日常生活を維持できる場合も

ある。それは継続的に危機が続くことでもあり、デメリットとも言えるかもしれない。むしろ危機を経験して家族が変化の方が望ましい場合もある。障害の程度と本人のパワーと家族の変化する力や安定を維持するちから、タイミングとの兼ね合いが重要である。

⑦個人のライフサイクルと家族周期という視点を持つ。

(3) 家族システムの特徴——浮かび上がって来たシステミックな家族観——

①家族にはパターンとバランス（恒常性）があり、絶えず変化する。個々人のパワーバランスがとれると安定するが、必ず変化する。

「本人さんが落ち着いたら、やっと『出番が来た』みたいな感じで結構きょうだいに何か起こる。」「親との力のバランスが崩れていく。そこが介入の一つのポイント」「お母さんがへたったら、お父さんが出て来て、段々具体的に（家族めいめいが）向き合い始めている。」

②家族システムの全体性。家族の全体性だけでなく、多世代、地域等、家族をとりまく様々な情報の全体を見、それぞれの相互作用をみなければならぬ。

③家族が回復するときは、必ずしも家族が維持されるわけでもなく、変化のためには、家族が保とうとしている安定を壊すことも必要である。

(4) 家族の持てる力——家族の所与のコンピテンズ——

①関係性についての力

①a 家族内関係

⑦家族関係が膠着しない。してもそこから動ける。与えられた今ここにある家族の中で折り合いを付けて行く。

⑧個人と家族が適度な関係がとれる。個人が自立し、主体を尊重されていること、役割が明確で柔軟であること。パワーのバランスがとれ、互いに適度な距離であり、凝集性が高い。互いに譲り合ったり、気を使いあっている。

- ④お互いの肯定的な関係。お互いに愛情を持ちあって関係する濃い情緒的な関係で、可愛い・大事に思っている。
- ⑤職員との関係
 - ⑦関係することができる。関係する力はオープンで、信頼関係を築け、ニーズを出せ、要求する力、家族のように甘え、委ねる力である。
 - ⑧そのためには関係するスキルも必要である。職員が円滑に支援できるためには、家族にも関係するスキルが求められる。そのスキルとは、サポートにアクセスでき、聴く耳を持ち、職員や関係者の要求に応じ、努力が見え、巻き込むことができるように上手にお願いしたり、SOS がだせることである。
 - ⑨外部との関係。家族内だけでなく、施設や親戚に対してもオープンで、社会資源を利用でき、職員や施設との関係をうまくやれる。主体的に家族が自立して、委ねる力がある。
 - ⑩問題との関係性。問題を焦点化し、理解し、受け止めて、適切に対処できる。
- ⑥コミュニケーションの疎通性。
 - ①相互理解して、聴く耳を持ち、会話ができる。
 - ②オープンなコミュニケーション（隠し事がない）。
 - ③コミュニケーションなしでもわかり合える関係性。
- ⑦家族自身が持つ具体的な力としては、変化できる力、具体的な実行力、努力する力や自尊心、凝集性。経済的な安定も重要である。また、一步引いて客観的に状況を見る事のできるゆとりがあり、敢えて社会適応しない力も力である。
- (5) 家族レジリエンスとは——家族システムとしての力——
 - ①関係性の視点から
 - ①関係を作り、繋ぎ、協働する力。社会資源を持ち、それを使う力。サポートを得やすい力。巻き込み（相談）上手である。資源として良いひとに出会える能力も重要である。
 - ②関係性を客観的に見直し、関係するすべてと肯定的関係が持てる。
 - ②変化と安定の視点から
 - ①壊す力。変化する力。それまでの形が「壊れ」てもそれに耐え、再生し、変化する力。
 - ②危機的状況に耐え、危機的状況を越えて「普通」の生活として平常心を保てる。
 - ③家族の形を変える力を蓄えて内在させ、資源を使えるようになり、問題が起きたら協働できる。
 - ④家族周期上で変化があり、それに耐える。
 - ⑤変化のタイミング。親と子どもの力のバランスが変化していくときに変化する。本人の問題行動が変化への契機となる。
 - ③危機をはらんだ安定。日常生活を維持して、あたかも適応しているようだが、解決へのステップとはならないような安定状態がある。良くない状態が継続していても、壊すエネルギーがない（多少大変な状態であっても現状維持の方が楽）。家族支援においてはむしろそうした安定を崩す必要がある。
 - ①家族が頑張っただけで安定している状態
「(ひどい状態のときに) いたって普通で『先生、よく来てくれてありがとう』とか普通に言わはって、入り込めない。」
 - ②母親ひとりの必死の頑張り、近所や親戚、施設に対して取り繕う。
「お父さんも何もきいてなくて、職員との話して初めてびっくりしはる。」「(母親が) 倒れるまでどうしようもない。病気になるはったら、そのときがチャンス…」
 - ③腫れ物に触るような状態。本人を刺激し

ないように、どんな日常生活でも耐える。麻痺状態や関わらない状態になっている。場合によっては家族が精神的なバランスを欠いている場合もあるが、それでも、互いに関わらない。

- ④愛着がなくても離れられない。何らかの家庭的な問題があったり、経済的な問題がある場合もある。

(6) 職員(ソーシャルワーカー)の家族レジリエンスを促進する支援

- ①基本的態度として、半端でない「腹を括った」受容と共感・傾聴、家族への肯定的理解、評価が大切であり、自分に置き換えて、家族のせいにはしないで寄り添うことを心がけている。

「『こんなに私はやってるのに誰もそれではめてくれない』。『私をほめて』って、『面接では私の話しを聴いて。私のために時間をとって』って(母親が)言う(ことを受け止める)」

- ②支援過程に則っての具体的なサポート
 - ①アセスメント過程。問題をフォーカシングし、動機付け、見極める目が必要。予防的アセスメントをし、読む(理解する/理解を進める)。
 - ②働きかけの過程。軽くジャブし、丸投げをかわし、タイミングをはかる。葛藤して動けない家族の背中を押すが、介入は集中して行なう。危機介入に当たっては迅速に徹底的にサポートする。短期的な目標設定をし、成功体験を経験させる。
 - ③具体的なサポート。施設や職員が具体的な資源として機能すること(訪問介護やレスパイトケア、送迎、学校訪問。本人や家族への働き場所の提供、個人や家族へのカウンセリング)であり、使える資源を導入する。一緒に動き、ピアカン的な場を提供し、時には家族がわりとなり、モデリングし、親のわがままをきく。揺れに付き合う。

- ④終結の枠組み。子どもが親から離れたら(グループホームや施設入所)終わりではない。原則的に施設入所はないが、家族と施設を含めて新たなシステムを再構築する。

- ③関係づくりの枠組み。
 - ①家族内(親と本人)の関係では、チーム、障害児・者、親(父と母)、きょうだいとのそれぞれの関係性が肯定的になるように試み、ディスエンパワーされた力(本人)をエンパワーして、障害児・者は親に、親は職員や周りに主張し、互いに向き合えるようにする。
 - ②職員と家族との関係では、家族全体を概観し、家族と障害児・者への思いを共有する協働関係を作る。本人のための支援であり、いつも本人やきょうだい、家族に開かれている。場合によっては親も育てるようなつもりで関わる。
- ④心がけていること。
 - ①支援者の主体性の確保(見極める目、どこまで腹を括ってやっているか。自分のスタンスがわかって相手のスタンスを問える、関われる)。
 - ②自己責任・自己決定を支える。(「日本型の自己決定ですかね。『Aの職員が支えてくれたら自分で決められる』とか、『みんなが良いよっていつてくれたら決められる』とか。自己責任も『みんなが良いよっていつてたんやから失敗しても良いか』って思える自己責任であったりとか」)
 - ③螺旋状で変化するものとして揺れに付き合ってプロセスを経験。
 - ④家族が職員や施設に気兼ね(遠慮)していることや、母親の影響性の大きい事を知る。
 - ⑤逆転移しないようにする。
- ⑤職員を支えるもの
 - ①家族、本人の変化。

⑥職場での支え合いが大きく、それには、仲間の支え、スーパービジョン、建前でない本音が言える環境、チームで動く、トップとの連携があつてこそである。「(危機介入時に親から感情的に言われて一番大変かった時に)『もうこんなやねん』とかみんなに言うて、わーっと言いながらも一方では支援を続けなあかん。…『で、も、ねえ』ってひとりでは抱えきれないときに『でもねえ』って脇で言ってくれる」…『〇〇長が一番怒ってんな。△さんの2倍くらい怒った』『もう仲間がいなくてできないです、この仕事は』『正論で、職員だからこうあるべきだ論だけでは絶対やってられへんもん』

7. 分析結果のまとめ

(1) 本調査の限界

本 FGI は「家族の持つ力」について、ベテラン職員がどのように捉え、どのように働きかけているかを知るためのものであったが、「家族の力」、「家族レジリエンス」は余りピンとこない考え方であり、家族は支援がなければ立ち行かない存在であるとの思いが多く語られ、家族の力を促進するような働きかけについてよりも、家族支援についてむしろ多くが語られた。

また、本調査において、「家族レジリエンス概念」というシステム論に基づく考え方について説明、強調され、さらに、筆者は基本的に調査においての調査者との相互作用の影響性は免れず、共同作業で新たな現実が構築されていくという立場(ガーフィンケル、1993)を採り、そのため、職員が家族の「家族レジリエンス」に気づき、「家族の力」を促進するような働きかけになることをむしろ意図して(ホルスタイン等、2004)、グループをファシリテートした。

にもかかわらず、3回の FGI の6ヶ月の経過を経て尚、グループメンバーは、筆者の言う家族レジリエンス概念を理解、共鳴し、家族の

主体的な力について語るよりも、支援者としていかに家族に関わるかに関心が高いように思われた。その一方で、1回目の FGI から、システミックな家族の見方は語られており、もともとそのような視点にたっていたのではないかと推測され、調査の影響性が必ずしも大きいとは言いがたいと考えた。

いずれにせよ、本調査は、一社会福祉法人での、筆者との関係性の上になりたつ結果であるところから、他の調査によって一層の検証を行ない、より信頼性を高める必要がある。また、前述の調査自体が働きかけになることを意図した影響性については更なる分析を行ない、稿を改めてその結果を報告したい。

(2) まとめ

家族は、とりたてて問題がないようであっても、何かがあるときには、その安定を壊して、再生する力、しなやかに外部の刺激を取り入れてその変化を過ごしていける力を持っている。それらを通して、家族はより自立し、成長していく。その自ら変化していく力がでない家族には、その変化の糸口を与えたり、押し下りする支援が必要である。とりわけ、成長とともに自立へのプロセスがみえにくい知的障害者・児にあっては、それは職員が用意する必要がある。

障害児・者や家族の支援は、その主体性を立ち上げるサポートである。一見落ち着いているような家族であっても、知的障害児・者の主体が無視されて親や学校の思いで子どもが適応しているのであれば、必ず何らかの不都合が生じてくる。それは危機をはらんだ安定であり、知的障害児・者は何らかの問題を起こして、家族は危機的状況に陥る。そのとき、家族は施設に SOS を出したり、それなりに変化しようとする。つまり家族が変化するためには、障害児・者本人の行動化や何らかの問題が必要であるとも言う。障害児・者を支援する立場としては、それなりに適応しているだけでは、良い状態であるとは言えず、安易な適応には逆効果もある。社会適応や地域での自立生活、親からの

子離れ等ではなく、障害児・者が主体的に生きることができるようになることが、支援の目的であり、そのための家族支援である。職員は家族の関係性やそのパターンを捉えて支援している。

FGI 全体を通して、職員は、①システミックな現象・家族理解、②基本的な倫理的態度、③障害児・者本人の主体を第 1 に考えるスタンスの 3 つの基本的基盤を持つことが浮かび上がってきた。具体的な、その職員の働きかけについては、具体的なソーシャルワーク支援過程と重なりを見せる多くの内容が語られ、今後の開発予定のソーシャルワーカー（施設職員）の家族支援マニュアル等に反映したいと思う。

本 FGI の結果から浮かび上がった家族レジリエンスを促進する職員のアプローチは「変化を起こし、変化を支える」につきる。その具体的な方策は関係性の調整である。例えば、「聴く」ことを通して、本人と家族と職員の間で肯定的な 3 者関係を作る。本人が親を大事に思い、親が本人を大事に思い、職員が本人を大事に思うところからそれぞれに信頼関係が生じる。その上で、変化できるように介入のタイミングを計り、変化へと刺激する。障害児・者の場合、子ども（本人）の力が弱い場合が多く、親が困るような問題行動があって、職員の介入を得て初めて家族の変化を生むことができる。危機介入の場合は、家族内の関係への介入のみならず、家族全般にとっての社会資源へも介入し、施設のサービスの提供等の具体的なサービスも有用である。それらを通して、徹底介入し、二次的变化（家族システムの変化）まで付き合う。

IV まとめ

家族支援にあつて、家族療法の貢献の一つは、家族の状態や家族に起こる現象についてのシステミックな理解であった。つまり、家族は外界とエネルギー交換をしつつ、形態維持と形態発生を絶えず繰り返すシステムであるとの見

方である。家族は絶えず変化し続けるものであり、それが自然の姿なのであり、変化にせよ、安定にせよ、その善し悪しの価値判断は一つのラベルにすぎない。

一端安定すれば、変化するはずの時に、変化をおそれて変化しない。あるいは安定が続いて変化しない。また、変化は危機的状況ともなる。職員は、そのような時に変化の触媒となり、あるいは、変化による不安定を支えることが必要であると実践を通じて感じている。今回の調査から、職員の現実的にはシステミックに家族を捉えて支援している姿が浮かび上がってきた。

また、「家族は、とりたてて問題がないようであっても、何かがあるときには、その安定を壊して、再生する力、しなやかに外部の刺激を取り入れてその変化を過ぎしていける力を持っている。それらを通して、家族はより自立し、成長していく。こうした家族の力が家族レジリエンスではないだろうか」という示唆を得た。家族の自立的な力が損なわれているときに、家族レジリエンスに着目したシステミックな視点によって力を回復するアプローチは有効であると考えられた。今後は、システム論に基づく家族療法の知見を活かしつつ、より家族レジリエンスが働くような具体的な支援方法について考えていきたい。また、本調査では、家族の力よりも、職員の力について重点が置かれた結果となったしまったが、既になされている家族の聞き取り調査等において、家族の力の分析をする予定である。

※本調査は平成 18-20 年度科学研究費補助金基盤 (C)「家族レジリエンスを促進するソーシャルワーカーと家族の会話プログラムの開発的研究」の助成によるものである。

※本調査にあたってご協力頂いた A 社会福祉法人と研究協力者の方に感謝申し上げます。

参考文献

安積純子、岡原正幸、尾中文哉、立岩真也

- (1995)『生の技法一家と施設を出て暮らす障害者の社会学』藤原書店
- 安梅勅江 (2004)『グループインタビュー法』医歯薬出版
- 安梅勅江 (2006)『グループインタビュー法Ⅱ活用事例編』医歯薬出版
- カリフォルニア・ピープルファースト編 (2006)『私たち、遅れているの?』現代書館
- ハロルド・ガーフィンケル他著 山田富秋・好井裕明・山崎敬一編訳 (1993)『エスノメソドロジー：社会学的思考の解体』せりか書房
- 畠中宗一 (2003)『家族支援論—なぜ家族は支援を必要とするのか』世界思想社
- ジェイムズ・ホルスタイン, ジェイバー・グブリアム著 山田富秋等訳 (2004)『アクティブ・インタビュー』せりか書房
- 伊田広行 (2003)『スピリチュアル・シングル宣言—：生き方と社会運動の新しい原理を求めて』明石書店
- 厚生労働省 (2006)「平成 18 年度厚生労働白書 <http://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/06/index.html>
- リンダ・レアル (2005)『ファミリー中心アプローチの原則とその実際』学苑社、10
- 松倉 (2000)「ソーシャルワークにおける『ストーリー』の思考」ソーシャルワーク研究, 03
- 麦倉泰子 (2004)「知的障害者家族のアイデンティティ形成についての考察：子どもの施設入所にいたるプロセスを中心に」『社会福祉学』45 (1)、77-87
- 中村 正 (2001)『ドメスティック・バイオレンスと家族の病理』作品社
- 中根成寿 (2006)『知的障害者家族の臨床社会学—社会と家族でケアを分有するために』明石書店
- 中田洋次郎 (2002)『子どもの障害をどう受容するか：家族支援と援助者の役割』大月書店
- 野々山久也 (1992)『家族福祉の視点：多様化するライフスタイルを生きる』ミネルヴァ書房
- 西村 愛 (2005)「知的障害児・者の『主体』援助者の陥穽を問う—ナラティブ・アプローチの批判的考察をもとに」『現代文明学研究』7：410-420
- 岡村重夫 (1963)『社会福祉学総論』柴田書店
- 小澤温編 (2003)『よくわかる障害者福祉』ミネルヴァ書房、134
- 芝野松次郎 (2002) 社会福祉実践モデル開発の理論と実際、有斐閣。
- 副田義也 (2000)『現代家族と家族政策』ミネルヴァ書房
- 社会福祉法人水仙福祉会 (2002)『強度行動障害を示す人の地域生活支援の方法論に関する実践的研究 (2002 年度財団法人大阪市市民共済会「開拓的实践・研究」助成事業報告書)
- 得津慎子 (2000)「家族援助における家族レジリエンスという視点—システム論に基づく家族療法の事例を通して—」関西福祉科学大学紀要第 3 号
- 得津慎子 (2003)「家族レジリエンスの家族支援への臨床的応用に向けて」関西福祉科学大学紀要第 6 号、39-50
- 得津慎子 (2004)「家族レジリエンス尺度の作成に向けて」関西福祉科学大学紀要第 7 号、119-132
- 得津慎子 (2005)「家族ソーシャルワーク序論に向けて」関西福祉科学大学紀要第 9 号
- 得津慎子・日下菜穂子 (2006)「家族レジリエンス尺度 (FRI) 作成による家族レジリエンス概念の臨床的導入のための試み」『家族心理学』20 (2)、99-108
- 得津慎子 (2006)「介護予防に至る家族・社会的要因」『介護予防実践論』大阪地域福祉サービス研究所、45-51
- 得津慎子 (2007)「お母さんあつての家族—家族レジリエンスという視点での聞き取り調査から—」『関西福祉科学大学紀要第 10 号』、41-53
- 鶴野隆浩 (2006)『家族福祉原論』ふくろう出版
- 鶴野隆浩 (2003)「家族支援理念の再考：家族福祉論の再構築のために」『社会福祉学』44(1)、3-11
- 植戸貴子 (2007)「知的障害者の地域生活移行とソーシャルワーク」『ソーシャルワーク研究』33(2)、22-28
- S・ヴォーンら (1999) グループ・インタビューの技法。慶応義塾大学出版会
- Walsh, F (1998). *Stengthening Family Resilience*. NY: The Guilford Press.
- 山根常男 (1998)『家族と社会—社会生態学の理論を旨として』家政教育社
- 山根常男・玉井美知子・石川雅信編 (2006)『テキストブック家族関係学：家族と人間性』ミネルヴァ書房
- 山田昌弘著 (2006)『迷走する家族』有斐閣
- 要田洋江 (1989)「親の障害児受容過程」藤田弘子編『ダウン症の育児学』同朋社、35-50